

韓国における葬送習俗の一考察

金

永 晃(禪晃)

(大正大学大学院)

目 次

はじめに

一、葬送儀礼の概念

二、祖先崇拜における葬送習俗

三、怨霊信仰における葬送習俗

結 び

はじめに

冠・婚・葬(喪)・祭は、人生における四つの別々の儀礼を表わす言葉である。これを通過儀礼と言うが、その中で死に関する葬送儀礼は最も重視されている。

儒教における葬送儀礼は朝鮮時代に一般化されたもので、中国から伝来した『朱子家礼』が中心となって、それが

また、韓国において『四礼便覧』と言う一般人の為の基本書物として普及されたものである。歴史を遡って見ると仏教を国教とした高麗時代、そして儒教を国教とした朝鮮時代の君主たちは民間信仰である巫俗信仰を淫祀として規定して、強く禁制したこともあった。また、現在においても迷信打破の対象となっている。しかし、韓国において巫俗信仰は古くから原始民間信仰であり、現在まで韓国民の精神面に大きな影響を及ぼしている。外来宗教が伝来する以前に巫俗信仰が支配的であって、現在もおお庶民生活の基盤になっていると言える。このように固有民俗宗教は過去に外来高等宗教との間に葛藤、対立しながら歳月の流れと共にだんだん習合、調和されて来ており、現在までなおいろいろな宗教と共に生き続けている。

儒教の葬送儀礼は「孝」を中心として形成されたのが特徴とも言える。しかし、巫俗では親に対する「孝」としての死体処理ばかりでなく、むしろ人間の靈魂が重視されるのが特徴である。

本稿では、巫俗信仰から見た韓国の葬送習俗を取り上げ、本来の姿を追求して、韓国人の精神文化を考察することにする。

一、葬送儀礼の概念

葬送儀礼は死者を葬る一連の儀礼を言う。「葬」とは文字の上から見れば、死体を上と下で覆うと書くのであって、死体を隠して見えなくすると言う意味である。『礼記』⁽¹⁾相弓第三にも「葬」とは「蔵」なり、蔵は人の見るを得ざらんと欲するなり、とある。

葬送儀礼において、死者処理の方法は葬法と呼ばれるが、われわれ人間の最も古く普遍的で、そして無意識的衝動の一つの意識的文化形式として考えられている。すでに人類の旧石器時代中期「ムステイエ期」⁽²⁾のものとされる遺跡があり、その意味では死体処理は宗教の発生と共に古くから行われていると考えられる。

印度には水葬・火葬・土葬・林葬（鳥葬）の四葬が行われていたことは『釈氏要覽』⁽³⁾巻下に「葬法、天竺に四あり、一には水葬、謂くこれを江河に投げ以て魚の餌となす、二には、火葬、謂く薪を積んでこれを焚く、三には土葬、謂く岸傍に埋めて速朽を取る、四には林葬、謂く寒林に露置して、諸の禽獣の飼とす」とあることも知られる。一般的に時代、場所、民族を越えて、死者に対して懐く感情は様々である。すなわち、死は肉体を崩壊させるから、屍体への恐怖感・嫌悪感があり、他方では遺族の悲しみ・嘆きと共に死者への愛惜の情が存在するといった相矛盾した、二つの感情の共存である。葬送儀礼の形式は基本的には、死は生者との別離であり、したがって死者と生者の分離が主要なモチーフとなってきたのであり、死者ないし死者の霊に対する生者の態度、すなわち民族のもつ世界観を反映して葬送儀礼もまた変化し変遷してきたということが出来る。原始・古代においては、死は超自然的な原因によって起こるとされ、死者は異常な状態にある危険なもの、穢れたものとされ、その霊は生者に対して害をなす恐ろしいものと考えられている。

葬送儀礼がもつ社会性・伝統性または文化性は多くの学者、思想家によって取り上げられているが、近代を概観するとこれをめぐる理論・学説には二つの大きな流れが見られる。

一つは、イギリスの人類学者に見られる宗教起元論＝本質論の主要テーマとしてアニミズム（Animism）⁽⁴⁾、アニマティズム（Animatism）⁽⁵⁾、呪術論⁽⁶⁾などである。タイラー（B・Tyler: 1871）は靈魂―死霊―精霊の図式の靈的存在の觀念の発生と展開を論証しようとし、死霊（Ghost）―祖霊への変化に注目した。

またスペンサー（H・Spencer: 1882）は死霊觀念が必然的に神觀念へと発展した過程を追求し、死霊を慰めるため墓に供えられた飲食物は神々を慰める供儀・奠酒の類となり、遠祖やすぐれた人々の死霊はやがて神格を帯びるに至ったとした。

フレーザー（J・Frazer）もまた、人類は一般に肉体の死後においても、その意識存在は永久に存在すると言う靈魂

不滅の信仰を有し、かかる信仰はあらゆる大宗教から原始宗教一般に見られることを重視し、死霊への恐怖感が葬送儀礼、その他の儀礼を生むにいたり、これが進化して宗教となったと論じている。これに対してマレット (R. R. Marett) は靈魂のような抽象的觀念が重視され、崇拜・畏怖される以前に一種の呪力・活力に直接反応した段階があったとし、アニミズムを修正したアニマティズムを主張した。要するに葬送儀礼や祖先崇拜のような成立理由を崇拜、慰める個人と死者 (死霊) との心理的關係の証明から証明しようとした。

もう一つは、フランス社会学派の流れをくむ社会的、あるいは構造・機能主義的宗教論の一環としての葬送儀礼論である。ドウルカーム (E. Durkheim) 学説に属するエルツ (R. Hez) は死の出来ごとを人生における他の重大な出来ごとである誕生および成人式と比較し、大きな一致点を発見し、このような人生の重大事において一つの社会的地位から他の社会的地位への移行が問題となるのであり、葬送儀礼は生者の集団から死者の集団への移行が関心事となつているとした。ファン・ジュネブ (A. Van Gennep, 1909) は人間が以前の立場と対立するような立場になると以前の立場に立った人々にとって混乱を起す危機を生じさせるので、このような混乱を安定させ、以前の状態に戻すことが必要であるとし、この際の儀礼を「通過儀礼」と名づけた、葬礼は通過儀礼の一つであり、人生の関門通過を意味づけるのである。

ラドクリフ・ブラウン (A. R. Radcliffe, Brown, 1922) は社会にとって死はその構成部分たる一成員の喪失を意味するから社会構造の均衡は大きく混乱するが、葬送儀礼を営むことは混乱した秩序を回復し、死者が残した空隙を象徴的に埋めることであるとした。

佐々木宏氏は「葬礼の宗教的意味に関する一考察」の中で「葬送儀礼は死者の靈魂に新たな場所を与え、死者が死者の社会に移行することを可能ならしめる営みでもある」と示している。

このように、諸学者においては靈魂、死霊觀念よりも葬送儀礼のもつ社会的意味、役割が関心の焦点となり、葬送儀礼の営みが社会秩序や社会組織のメカニズムと関連、対応されながら追求されている。前者は靈魂―死霊觀念から葬送儀礼を説明しようとしており、後者は儀礼の担い手としての人間、社会の状況から、または、それとの関連において葬送儀礼を説明しようとしている。デュルケム学派のエルツ (D. Hez) は『死の集団象研究への一寄与』の中で「死を人生における他の大きな出来ごと、ことに誕生と成人式に比較し、そこに一致点を見出している」と。つまり、そこにはある社会的地位への移行が問題となっており、葬送儀礼の場合には生者の集団から死者の集団への移行が問題となつていると主張した。このように諸学者によって葬送儀礼は定義づけられている。

二、祖先崇拜における葬送習俗

韓国の葬送習俗を論ずるならば民間信仰である巫俗信仰を理解する必要がある。

巫俗信仰に祖先崇拜があるか否かと言う問題に入る前に、祖先崇拜に関する定義を考えてみよう。祖先崇拜という言葉は文字通り、祖先を崇拜することであり、死霊崇拜や更に死者への儀礼一般をも祖先崇拜とみなす者もいる。しかし、祖先とは具体的に誰を意味し、崇拜とはどのような内容のものであるかという点に意見はまちまちである。

韓国では祖先を意味する言葉としてしばしば「祖上」と言うのがある。この他に「先祖」「先代」「始祖」「氏祖」「亡霊」「元祖」「亡者」などがあり、「先祖」という言葉は中国・韓国・日本で共通に使われている言葉である。中国で一般的に使われる「先祖」とは中国の各時代を通して少し意味が異なっている。広義の意味としては『詩経』『孟子』『史記』などで記されているように家の代々を遡って家系上の祖先を意味している。狭義の意味としての先祖は現在の家を立てた祖神、つまり中国宗教制度上儀礼の対象になる神である。日本でも先祖とか祖先の觀念は単純ではなさそうである。つまり、中国・韓国・日本の三国で同一の「祖」の文字を使って祖先を表わすが同じ觀念ではない。ここに一つ分析概念をもつ言葉として「Ancestor」「Ancestor worship」がある。祖先崇拜は Ancestor

すべての人間が死んで祖先にはならない。祖先と言う概念は子孫をもつことを前提とするものであるから当然血縁觀念が基盤になる。また祭祠と言う儀礼を通じて実施されるので、宗教的次元にも重要である、その為に宗教と社会が祭祠に密着していると言うことが出来る。子孫を残すのが祖先になる必修条件ではあるけれども充分な条件にはならない。その他にも祖先になる為の条件として「死に方、または一定の宗教的資格が必要である。死に方には正常死と異常死に区別されうる。崔吉城教授は『韓国のシャーマニズム』の中で正常死を次のように述べている。

- 一 通過儀礼を経て還暦以上まで長生きし、子供を、特に男の子を産んで家族継承が出来る条件と、
- 二 自宅で老死することで、客死や事故死でないと言う条件が伴う。⁽¹⁷⁾

この二つの条件を満たした者が死んだ時には、「好喪」と呼ばれ死穢の觀念が弱い。また、このような死霊は早く祖先神に転じ、家族の守護神となりうると信じられている。このような死霊は必ずしも死霊祭を行わなくてもある期間が過ぎれば祖先神になると信じられており、それを促進する為に、また、社会的意味として行われるのが普通である。

異常死は正常死でないもので、事故死、短命の妖死の類で、幼死、出産死、未婚の男女死などである。特に結婚年齢に達した独身男女の死は異常死として、その死は恐しい「モンダル鬼神」になると言われる。時にはこのモンダル鬼神を慰撫する為に死後結婚をさせることもある。

死後霊魂はどこかに行ってしまうのではなく、一定の範囲内で移動しながら家族や親族に死穢や害を受けると言う觀念がある。特に恨みを残した怨魂の場合はこのような性質が最も強い。怨魂を慰める為に鎮魂するのは歴史的にも広く知られることである。⁽¹⁸⁾不幸に死んだ場合の死霊を慰めるために行われる慰霊祭は古くから、高等宗教もしくは原始宗教にはしばしば見られる現象である。このような儀礼の根本的思考は信仰の基盤とも言うべきもので、その上で慰霊祭が行われるのである。

次はその信仰の基盤を検討して韓国人の死霊觀を考察して見よう。

韓国人は一定の生涯と死、そして死後の存在様相などの死生觀がある。一生涯の過程で最も重要なのは通過儀礼である。冠婚葬祭と言う儒教的形式と制度がこれをもっと強化し「意味を賦与することが出来てもすべてを説明することは出来ない。なぜなら儒教以前の韓国的死生觀においても通過儀礼の重要性が推測されるからである。

成人になって結婚し、子孫を残して、還暦祝いを終えて、それから死を向えると言う一定の形式がある、早死の場合には急煞(急死)したことになる。あまり長くも短くもない期間病氣ぐらいで、子孫の臨終の中で死ぬことが理想的死に方である。死んだ人は子孫によって祭祠を受ける中で徐々に死の世界に入り、後に祖先になるのである。このような一定の形態と過程、すなわち、正常死が典型的に理想的であるけれども実際の時、このような過程を満足するには至らない場合がある。第一に、通過儀礼を全うしなくて死んだ場合の早死はもちろん、成人になって結婚しないまま死んだ未婚死の場合は怨霊になりがちである。結婚は単に性的結合だけではなく社会的結合を意味する成人になる基準でもある。身体的に成人しても結婚しない場合死んだ霊魂は成人にならなかつたので怨霊になり、また親より早く死んだ場合が異例なので怨霊になり、親に対する不幸にもなって不幸死になって怨霊になるのである。このような子供の怨霊もしくは未婚死は「モンダル鬼神」と言って人間に害を受けやすいものである。第二に、死に方若しくは状態も問題になる。自分の家で臨終出来なくて外で死んだ場合、すなわち、客死した場合、もしくは予想しなかつた場合の死も怨霊になる。他殺、自殺又は、動物、機械、交通機関による事故死、戦死、海上事故による事故死も怨霊になる。この中で自殺した場合が最も恐しい怨霊になる。なぜかと言うと自ら死を選んだのであるけれども死を選ぶほどの恨みを抱いているからである。他殺また事故死の場合も天寿を全うしないでくやく死んだ場合も不幸に死んだので怨霊になる。第三に、死んでから儀礼を行い子孫の祭祠を受けなければならぬ。祭祠を受けない場合祖先は飢餓になり、結局怨霊になるのである。子孫がなく死んだ場合を「無子鬼神」と言ってやはり怨霊になるのである。

以上三つの場合の怨霊の状態のように正常の場合の正常死には祖先になるのであるが不幸に死んだ場合には怨霊に

なるのである。孫晋泰先生はシャーマニズムを宗教学上悪精霊の崇拜思想として見てシャーマンを悪霊を追い払う魔術師と呼んだ。したがってシャーマニズムをこれら悪精霊と関連して考えた。⁽¹⁹⁾

悪精霊の種類は、

一、人間が死んで悪精霊になったもの。

- (一) 現世に未練を残したものの、(二) 祖先、親族、(三) 客死鬼、自殺者、(四) 他殺者、(五) 水煞者、(六) モンダル鬼神、(七) 無後者、カタキの敵、(八) トケビなど。

二、動物または妖獣の魂が精霊になったもの。

- (一) ヘビに噛まれて死んだ者、(二) 自分の家でない所で客死したものの、(三) その他の動物によって死んだ者、(四) 狼、虎などの妖精

三、邪^{まじ}まで怪しいものによって発生したもの。

- (一) 金銀のように長い間隠れていたもの、(二) 古い衣服、古い器物、(三) 古家、廃家、(四) 古い井戸、(五) 海の怪物―水の鬼神、などのものである。

このように悪精霊の雑鬼は子孫もしくは人間に害を受けるし、また一定の居場所がなく、暗い所が好きで明るい所をいやがる存在である。雑鬼は死んだ当時の状態のままに止まり、死んだ当時の子供は子供の状態のままに止まっていると考えるのである。孫晋泰先生は悪霊のカテゴリの中「雑鬼」は陰地に過ごしながら人間にくっついて汚れを受けるとして、したがって悪精霊は人間に本質的に悪い影響を受けるものである。彼が言う雑鬼は本稿では怨霊に当るのである。⁽²⁰⁾

村山智順はこのような怨魂(怨霊)をはっきりと分類をせず鬼神と言う範疇にしている。彼は日本の鬼神は悪神だけで、善神はこの範疇に包まれないが、韓国、中国の「鬼神」には善神も包まれる広い意味の観念を指摘して、特に

韓国的特徴の強い「孫閨氏^{ソンカンケ}」と冤鬼などに注目している。孫閨氏は未婚の女性が死んだモンダル鬼神として主に未婚女性に取りついて病気になる悪鬼である。もしこの病気で未婚女性が死ねば男性の衣服を着せ、頭を逆にして埋め、刺のある木で覆い十字路に埋めて多くの人に踏まれて悪鬼が外へ出ないようにする。特に未婚女性の貞操に関する悪い噂で本人が潔白を主張する為に自殺した怨霊は君守(県長)または監司^{カンシ}に取りついて病気になる死ぬ^{みよぶ}と言う迷信もある。したがって役所では自殺した事例を調べ、多くの烈女門^{レツニョモン}を建てて慰めてくれる、烈女門の過半数が怨霊を慰める為だ⁽²¹⁾という。

水に溺^{おぼ}れて水死した人の怨霊は他の人を水に引張る力を持ち、早死した婦女の怨霊は主人の後妻に取りついて病気になる傾向がある。このような怨霊を利用して占う巫堂もいる。子供が飢餓死になった指を切つて体につけるとその怨霊が体に取りつけられ占う能力を得られると言う。これを「胎主力^{テイシュリキ}」と言う。孫晋泰先生はシャーマンが主に悪精霊の中で病気をもたらすと言う怨鬼を特徴づけて説明した。これは怨霊を説明するに重要な概念になる。

雑鬼、雑神の「雑」と言う文字は「卑^ひしい」「下品^{ゲヒン}で乱雑だ」の意味で複数の下位神を指す言葉である。怨鬼・客鬼・モンダル鬼神などの雑鬼・雑神は次の属性をもっている。

第一、雑神は儀礼などで集団的に供養される。(個別的に存在する場合もある)。上位神を個別的に供養するに對して、雑神は集団的に供養される。

第二、雑神は下位神である。特に正常死の場合、または正常的祖先神に比較して下位神である。雑神は神として供養するのではなく、出来るだけ再接近をさける為に呪術的に威かして粗末に扱われる。

第三、孫晋泰先生が指摘したように悪精霊は悪の存在である。その為、人間に取りついて死穢を起こす、死穢の種類は怨魂によって異なる。水鬼は人間を水の中に引張る力を持つ、本妻の怨魂は後妻に取りつく傾向がある。かたきを討ちたい相手に取りつくメカニズムがある。

第四、怨霊は執着性をもつものとされる。自殺の怨霊はその家に執着して夜に出現する交通事故で死んだ場合の怨霊は事故支点に執着して、また他の事故を呼び起こす属性をもっている。その場所が狭い場合に限ることもあり、時には村全体、また村の範囲を越えて広い地域に拡大する場合もある。怨霊が山神の場合は山神が管割する地域全体が影響をおよぼす傾向がある。

第五、死の状態に止まる属性をもつ。死んだ子供はいつまでも子供の状態に止まる。妾で死んだ人は本妻が死んだ後にも本妻に昇格されずに、生存時の状態、地位がそのまま持続される。それはものに、いつまでも執着する性質を持っているからである。

第六、神霊性をもつ。怨霊は人間に取りつかれて、自分の存在を表わしたり、また自分の恨みを強く表わせる。

又、死んだ子供は生者の子供が出来ない神霊性をもち、怨霊でありながら、その怨霊をよく慰めれば神になる属性を持つもので、それを利用して降神によって占う能力を得られると信じている。

次に儒教の祭祠と巫俗の関わりについて考察して見よう。

儒教の祭祠は正常的な死と生涯を終えた祖霊を祭るものである。儒教の祖先の中で偉大なることをした祖先は「不遷位」になって永遠に子孫の崇拜の対象となる。偉大な祖先でなくても一定の生涯を過ごして通過儀礼を経て正常死した場合は四代奉土（祭祠）を終えれば家の祖先、または門中の氏族の祖先として崇拜される。これは原則的に正常な生涯を終えて正常死であって死んで一定の儀礼を辿って祖先神になる構造である。その点祖先神は雑神とは対照的である。

雑鬼は非正常な人間の靈魂である。祖先神は家庭のレベルを維持しながら血縁的に拡大され、門中、または氏族の次元で崇拜されるのが重要な特徴であるが、雑鬼は村落もしくは拡大された領域、例えば山を中心とした地域、より拡大された郡地域に拡大された次元で扱われる。

雑鬼は原則的に家の外に存在する。雑鬼は家の内に執着してはいけない存在である。その為に悪鬼抜いをする必要がある。雑鬼は一定の人によって供養されたり、崇拜されることなく、放浪する鬼神の存在である。その為、悪鬼抜いの対象であり、怨霊との関連性から巫俗信仰の対象となる。これらの点から見ると儒教は信仰性が弱いため、巫俗の信仰性がより必要であって、二重的機能を保つようになったと考えられる。

結び

以上、韓国における葬送習俗と巫俗を述べたように、葬送儀礼が単に死体の処理ばかりでなく、死者に対する生者の態度、つまり、祖先崇拜のプロセスとして展開されることがわかる。儒教においては、葬送儀礼が親に対する「孝」の延長として存在し、それが一定の期間が通過して祖先神に展開されるが、民間信仰の中の巫俗では、むしろ儒教儀礼で無視されている存在、すなわち、早死者を含めて、事故死、未婚死などの異常死などの怨霊の存在が主に重視される。これらの異常死は一定の期間を通過しても、そのままでは祖先崇拜の対象にはならない。異常死は死穢の觀念が強い為、悪鬼抜いをして祖先神に展開していくことが必要である。その点、巫俗信仰における死霊祭のもっとも重要なこととなる。このように葬送習俗から見ても、韓国人の靈魂観を理解する一つの手がかりとなるであろう。

父系原理による儒教における男性（司祭）中心に対して、巫俗では女性（巫堂）が中心となるのも一つの大きな特徴である。

葬送習俗の様相はどの民族においても、またどの儀礼においても同じように発展しているわけではない。民族によって、信仰によって様々な文化現象を表わしている。そこには各民族のもっている世界観、もしくはその民族の来世観を反映するものである。

△註▽

- (1) 『礼記』は儒教の基本的文献五經の一つ。礼についての理論及び解説を記したものである。(周易・書經・詩經・春秋・礼記の五經がある)
- (2) 小口偉一外、『宗教学辞典』、東京大学出版会、一九八〇、五〇八頁。
- (3) 印度の聖典。(一〇一九年、宋道誠集)。
- (4) ラテン語の *anima* すなわち、靈魂と云う語に基づいた語、有靈観と訳される場合もある。
- (5) すべてのものに靈魂があると言うアニミズムに対して、すべてのものは「生きている」とする点で、未開人の人生観なり世界観と言えり。有生観と訳される。
- (6) 呪術論とは、何らかの目的の為に、超自然的存在(神、精霊その他)あるいは呪力の助けを借りて、種々の現象を起こさせようとする行為及び、それに関連する信仰の体系を意味することから、ヨーロッパの哲学は十六世紀以来、知識と云うものを、(a) 実証的に検証できる科学的知識と、(b) 経験的な検証を経ずに主張される教義的知識に分けてゐる。この教義的知識はさらに、(一) 宗教的信仰のように、本質的に検証できない知識と、(二) 検証によって誤謬が証明される知識とに分類される。このような知識の分類は、フレーザー(J. G. Frazer)によって、(a) 科学、(bi)、宗教、(bii)、呪術と云う形で受けつがれ、進化的に図式化されたのである。
- (7) 通過儀礼と云うことばは、オランダ生れの民族学者(Van Gennep・Arnold)が通過儀礼(Les De Passage 仏 The Rites Passage 英)と云う書物によって一躍広く用いられるようになった概念。彼によれば、通過儀礼とは、「一つの状態から他の状態へ、あるいは一つの宇宙のないし社会的な世界から他の世界への通過ないし移行を伴っているすべての儀式の諸体系である」と言う。人生にはいくつものおもな関門がある。誕生から結婚、また最後の死まで、いわゆる一生に関する儀礼である。
- (8) 佐々木宏、「葬礼に関する一考察」、『教化研究』十五号、昭和四七、三〇頁
- (9) 崔吉城、「韓国のシャーマニズム」、弘文堂、昭和五九、三二六頁。
- (10) 藤井正雄、「祖霊信仰の観念」『講座日本の民俗宗教』三、八神観念と民俗、弘文堂、一九七九、六九頁。
- (11) 'Folklore and Korean Ancestor worship. 『文化人類学』第六輯、一九七四、「韓国祖上崇拜儀式の研究」、『文化人類学』第七輯、一九七五、から知ることが出来る。

- (12) 崔吉城、前提書、三二六頁、再引用。
- (13) R. L. Jantli・任敦姫、「韓国祖上崇拜の研究」、『文化人類学』第七輯、一九七五、一五三頁。
- (14) 張哲秀、「儀礼生活」『韓国民俗大観』(社会構造冠婚喪祭)、高大民族文化研究所、一九八〇、六八六頁。
- (15) 赤松智城・秋葉隆『朝鮮巫俗の研究』上巻、東京、一九三七、一頁の中で「バリ公主」を巫祖説話と名づけた。「捨姫」の意。
- (16) 申東一、「シムチョンクツ」『韓国民俗学』第四輯、民俗学会、一九七一。
- (17) 崔吉城、前提書、二八〇—二八一頁。
- (18) 梅原猛、「怨霊と鎮魂の思想」『日本における生と死の思想』(田村芳朗・源了圓編)一九七七、
- (19) 『孫晋泰先生全集』六、太学社、一九八一、一八一—一二頁。
- (20) 前提書。
- (21) 昔の地方長官に当る觀察使。
- (22) 節操堅固で波瀾万丈に堪えた賢明・柔順な性格の女として、妻としての道理に全力を尽し他の模範となる人を記念する為に建てた石碑をかこう屋根のある門のような構造物。
- (23) 村山知順、『朝鮮の鬼神』、朝鮮総督府、一九二九、二二九頁。
- (24) 前提書、一八四—一九五頁。